

週刊メッセージ “ユナタン” 4

～ “その子らしさ” とか “個性” って何でしょう ～

平成 27 年 10 月 21 日 片山喜章

10月17日、法人7園（小規模保育園はなし）の運動会はすべて終了しました。基本理念やメインの種目はおおむね同じですが、運動会という“晴れの舞台”の中で、実際に見せてもらった子どもの姿から“その子らしさ”“個性”とは何か、ちょこっと考えてみたいと思います。

運動会や発表会（音楽会、造形展）は、これぞまさに「日本独特の伝統文化」と言えます。

私たちは種目内容とともに練習過程で「子どもどうしの関係性をいかに育むか」、そう考えて実践しながら本番を迎えました。しかしどんな練習方法であっても、本番、“晴れの舞台”を大勢の観客に見てもらっただけで成就感を味わいます。一定の期間、みんな練習し、本番、成功したり失敗したり、それぞれ、その子らしい運動会を体験し、成就感を味わう（事の共有）ことで“その子らしさ”を力強く後押ししたと考えます。どの園においても運動会以降、子ども集団がグンと伸びる（伸びた）と保育者集団は実感します。ですから本番の「出来」「不出来」で一喜一憂するのは、親心としてわかりますが「教育の成果」とは別物であるをご理解ください。

当日、大勢のお客さんを目の当たりにして応援や拍手を浴びると圧倒されて、緊張し、感激します。どの子においても非日常体験ですが、そこで「自分という存在」を強く意識する機会に出会えたと考えられます。そこで現れ出た姿こそ、その時点の“その子らしさ”であり、それを親として、保育者として、園として、どう感じ取ればよいか自問自答する価値のあるテーマです。

今年も当日、いろんな事情が重なってくじけてしまって参加できず、担任につき添われる場面がありました。「ああ、そんなこともあるよね」と我が子でなければ温かいまなざしを送ります。

しかし、その子の保護者にとって、またその子自身にとっては、もどかしいような、悔しいような、少し切ないような“格別”の気分になることがあります。そんな時、その子の担任や保護者は、何よりも、くじけた「理由」を知ってあげることです。くじけた理由を理解して共感することが適切な関わり方だと思います。その“やさしさ”が、その子自身が「もう、くじけないぞ」とリベンジする力に繋がると思われます。頭ごなしの叱咤激励では、増々“物怖じ”するだけで、共感する態度、つまり愛情あふれる態度が、物怖じする気持ちを和らげると考えます。

それでも、毎年毎年、年長になってもくじけてしまうなら・・・、“我が子は、なんて感受性が豊かなんでしょ”と心底から“その子らしさ”として受けとめて認める。そう考えることで“その子らしさ”が保たれて、そののち、個性的に生きていけるのだ、と信じてはどうでしょう。

「個性的」とは、一般的に「奇異」に思える言動や生き方に対する「言葉」で、日本人は好んで受け入れないように思います。けれども一方で《あなたは、あなたのままでいい》という表現もケースによっては有効ですが、曖昧で舌足らずな表現で、私には強い違和感があります。

“自分らしさ”を「個性」として貫き通す。そのためには、同時に“物怖じしない意志”が必要です。「個性」を“個性的な人”として社会に認めさせる“物怖じしない意志”です。

「かけっこ」も「演技」も緊張する状況で物怖じしないで、がんばろうとするその子の挑戦だと捉えています。組体操は、本番もその場で相手を選んで役割分担しますから、より強い葛藤を味わいながら演技します。なので、より強い個性的な関わり合いが要求されます。場面がわかる度に、物怖じしそうな気持ちと対峙しなければならず、そこに最高級の教育的意義があります。

いくつかの園では5歳児がマイクで種目紹介をしました。大勢の前でひとりで（ないところもありました）アナウンスするのは、大人でもビビります。その際、A君は、堂々と種目紹介をして、そのマイクとカンペを本部席に返しました。一方、B君は、大きな声で種目紹介をしたものの、さっと走ってカンペを本部席に掘り投げて返しました。私はここに、B君の物怖じしている度合いの深さを感じます。大勢の前でひとりでアナウンスする、うれし恥ずかしい気持ちに対して、A君は物怖じせず、B君は物怖じしそうになり、結果、その気持ちを照れ隠すように掘り投げるといふ雑な行為に至ったと私は解します。けれども、B君に上から注意するのは間違いだと思います。マナーを会得させる問題ではなくて、物怖じする気持ちを克服してもらう教育ですから、人前で自分を表現する機会を多様多彩に増やすことがB君にとって有効だと考えます。

毎月のお誕生会の企画に参加し司会進行の経験をしたり、そこで得意技を見せたり、少人数のグループで日常的に話し込む経験を重ねることで“物怖じしない精神”が育まれ、自分の個性を“個性的なものとして社会に認めさせる力”を養っていくと見通して、今、実践を画しています。2月の発表会も良い機会です。物怖じせず堂々とした態度が身に着くことをめざしていきます。

極論ですが、日本社会全体が、子どもに対して「お行儀よくあれ。みんなと同じようであれ」と願っていると思います。ある意味、物怖じする子ども（人間）にしようとなしと無自覚に導いていると感じます。これが学校教育だけでなく日本社会の根底に流れている問題だと危惧しています。

運動会本番、物怖じしない子にするために、くじけそうになったとき、「どうしてできなかったの！」と叱咤激励しない方が良い子の場合と、自尊心や向上心を抱いている子の場合、「どうしてできなかったの！」と叱咤激励することで、その言葉の奥に潜む親や先生（コーチ）の期待や《愛》を感じ取って、一層、個性的に“その子らしく”物怖じせず、能力を向上させる場合もあります。それはもしかして、子どもではなくて、叱咤激励しようとする大人の側の個性的な生き方の問題＝物怖じしない度合いによるものかもしれません。